

つながりの中でくらす
望まれた人として生きる
自分らしく生きていく



No. 13

2007年7月発行

3周年記念シンポジウム

「いのちをまなざす いのちによりそう」

2007年5月12日(土) 13:30~17:00

大阪市立城北市民学習センター 講堂

後援：大阪市旭区役所、大阪市旭区社会福祉協議会、千里金蘭大学

参加者 68名

障害児の親、不登校児の親、障害当事者、難病当事者、地域住民、福祉関係者（社会福祉士、ケアマネジャー、ヘルパーコーディネーター、ヘルパー等）、医療関係者（看護師等）、教育関係者（小中学校教員）、大学生・院生・専門学校生 等

◇基調講演 「『生』と『命』が紡ぎだすもの・子どもと家族の心象風景から」

川口正義氏（子どもと家族の相談室『寺子屋お〜ぷん・どあ』共同代表、東北福祉大学兼任講師、社会福祉士、静岡市清水区）

◇シンポジウム 梓川一氏（千里金蘭大学人間社会学部人間社会学科准教授）

向井裕子（地域生活サポートネットほうぷ、社会福祉士）

川口正義氏

コーディネーター 鳥海直美（千里金蘭大学人間社会学部人間社会学科、

地域生活サポートネットほうぷ、社会福祉士）

「地域生活サポートネットほうぷ」は、設立以来、「くらし」の視点から地域の課題をとらえ、さまざまな「つながり」をつくり、一人ひとりのかけがえのない「いのち」への想いを深めながら、地域に根ざした活動を目指してきました。設立3周年を迎え、さらなる一歩を踏み出すにあたって、いのちに寄り添う福祉・医療・教育のあり方を地域の皆さんと一緒に考え、今後の活動の一助にしたいとシンポジウムを開催しました。

最初に、川口正義さんに講演をしていただきました。さまざまなトラウマをかかえる子ども達に寄り添ってこられた川口さんの実践報告とソーシャルワーカーとしての熱い思い、そして、社会に対して声を上げることのできない子ども達の心の叫びを伝えてくださいました。次に、梓川一さんが「豊かな出会い～難病とともに生きて」、向井裕子が「ありのままのいのちをはぐくむ」をテーマに語り、シンポジウムを行いました。

た。立場や活動の異なる3名の語りは、クロスしていることが多く、いのちに向き合う想いや、いのちに寄り添うことの大切さを参加者の方々と共有できたと感じられるシンポジウムでした。

大阪府内外から70名近くの方々にご参加いただきました。障害児の母親や不登校児の親の会の方、障害当事者の方が会場からご発言いただき、想いを分かち合う場となりました。また、アンケートを出してくださった39名全員から「良かった」という声をいただきました。実践や体験にもとづいた語りが参加者の心に響いたものと思われます。参加者の感想からは、このシンポジウムが、参加者の方々の元気の素になるとともに、「いのち」を見つめ、自分自身を見つめ、人と人との関係や地域社会のあり方を考える機会となったことを感じました。

さらに、アンケートからは、「地域に密着して、そこに暮らす人たちに寄り添っていく」という[ほうぶ]の活動に共感し、応援してくださる方々の想いを受けとめることができました。福祉サービス提供事業者ではない[ほうぶ]の活動は、世間から見れば「わかりにくい」活動だと思います。試行錯誤をしてきた3年間でした。スタッフ一同、皆さんの応援を力に、「自らの足元を掘る」次の歩みを始めたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

<参加者の感想から>

- ・ すがすがしい気持ちで心が洗われる思い。
- ・ 『支えること』の意味に本当に共感した。
- ・ 「命」「生」のテーマ良かった。
- ・ 孤立したらあかん—孤立させたらあかん。
- ・ 誰もが力を持っていることを再認識した。
- ・ いつも追われている自分がいてとても心が疲れていた。心がエネルギーを得た。
- ・ しんどいと思っていることをプラスに考え『前向きにあきらめていく』ことで、人生が変わっていくことを学んだ。
- ・ 『弱さのすばらしさ』を教えていただき、自分を肯定的に捉えることができた。
- ・ 自分が薄い価値観の中で仕事をしているように感じた。いのちの重みを見つめていきたいと思った。介護のあり方をもう一度自分の中で作り直そうと思った。
- ・ 生きること、命—そのすばらしさを教わった。
- ・ 仕事に不安や悩みを抱えている自分にとって貴重な話だった。
- ・ この場にいることで安心するような会だった。語ることの大切さを感じた。
- ・ 出会いだけが本当に人が人を支える一歩。出会いが人格を作る。
- ・ 当事者という枠の外から支援をするということを基本的に考えるいい機会だった。
- ・ 人との出会いや寄り添うことの大切さを改めて感じた。
- ・ 地域での活動にとって大切なヒントをいただいた。地域で活動したい。
- ・ 何とも言えない気持ちが溢れてきた。運命を受け入れて突き進んでいこうと思った。
- ・ 涙が止まらなかった。人生で何度も聞けない話をいくつも聞き感動した。
- ・ 当事者が思いを語るということは重要だと思った。
- ・ 亡くなった人にとって自分はどのような存在だったのか、考えるきっかけになった。
- ・ 命に対する様々な話を聞いて命の大切さについて考えることができた、とても良い時間でした。
- ・ 「生きているだけでいい」という言葉を聞いて嬉しかった。



- ・ とてもさわやかに感じた。ともすれば、重い問いかけがたくさん含まれた内容なのに、パネラーの方も、スタッフや参加者たちも「いのちをまなざす いのちによりそう」ことをとても真摯に考えている、皆さんが希望をもって生きているからこそ、かもし出された、その雰囲気よかったのかなど。
- ・ 当事者の実感から語られる言葉は力がある。だから人のこころをつかむ。語るために、これまでのことを振り返り、向き合い、言葉にしていく、それはつらい作業に違いない。そういう過程で人はどんな年齢になっても成長しつづけるのですね。困難な状況を打開していくのは、まず、そこからだなと思う。
- ・ 福祉専攻で学んで、出会えた人とのつながりを大切にしたい。福祉に進んでなかったらきっとこんな話を聞いていなかった。
- ・ 将来ソーシャルワーカーになって利用者に寄り添って考えられる専門職者になりたい。

<ほうぶに期待すること～アンケートから>

- ・ 行政のひずみで困っている、苦しんでいることを見つけて手をさしのべて欲しい。
- ・ 人を区別することなく地域で根ざした居場所作りをして欲しい。
- ・ みんなが自分らしく豊かに暮らせる地域を目指して、今後も活動を続けてください。
- ・ いろいろ悩む方たちに勇気がでる支援を続けて欲しい。
- ・ このような講演を聞かせてください。こういう機会がなければ今日のような話もきくことができなかった。出会いを大切にする、ふれあいの環境として活躍してほしい。
- ・ ゆっくり、じっくり、自由に、ありのまま。
- ・ 地域のさまざまな生命の支え手であって欲しい。
- ・ 地域のいろいろな世代とつながっていて欲しい。
- ・ 親子、兄弟がともに遊びをする企画。
- ・ 障がいをもった子どもたちの居場所づくりなど。



● シンポジウム当日の一時保育 13:30～17:00

参加者：子ども8名（うち障害児5名）、学生ボランティア8名、保育スタッフ3名

<保育ボランティア感想>

- ・ 子ども達と楽しい時間を過ごすことができ、障害とは…ということについて改めて考えさせられました。障害って自分の心の中にあるものかもしれないのかな？と思いました。自分と異なると思った時点で区別してしまったり…。全て理解できなくても近づこうと思ったり、ともに歩んでいこうとすることが大切だと思いました。今までは、お手伝いする、何かしてあげたい、とばかり思っていました、そうではなく、寄り添っていき、その中で色々なことを学ばせてもらうんだ、と肩の力が抜けました。
- ・ 保育ボランティアに参加しようと思ったきっかけは、子どもが好きだからという理由だけでした。障害をもった子どもさんと遊ぶのは初めての経験で、最初はどうやって接したらいいんやろ？という不安がありましたが、一緒に遊んだり話をしたりするうちにそんな不安はなくなりました。また、子どもさんのご家族と話をさせていただき、今まで自分が気づけなかったこと、考え方など、自分自身の新しい発見もありました。とても充実した時間を過ごさせていただきました。参加して本当に良かったです。



障害をもつ子どもを育てている

保護者交流会 & 音楽で遊ぼう

2007年5月27日(日) 13:30~16:00

大阪市立城北市民学習センター 研修室2 & スタジオ

〈参加者〉 保護者交流会：障害児の親10名、スタッフ3名、学生ボランティア1名
音楽遊び：子ども15名(うち障害児11名)、保育スタッフ3名、
音楽療法士2名、社会人ボランティア1名、
学生ボランティア12名、高校生ボランティア1名

今年最初の保護者交流会を開催しました。子どもの年齢で2グループに分かれ、意見交換をしました。最後の30分間は、グループで話し合った内容を報告し合い、意見を共有しました。毎回、元気が出る意見交換が行われています。

子ども達は、スタジオで音楽療法士リードのもと、音楽を使った遊びをしました。積極的に参加する子ども、知らん振りをしながらも音楽を気にしている子ども、戸惑いつつ子どもに寄り添おうとする学生さん達、それぞれの楽しい時間を過ごすことができました。

◆ 保護者交流会報告

〈低学年グループ〉 小学校1・2年の保護者5名、ほうぷスタッフ2名

内容：自己紹介 子どもの様子や今の悩みについて 家庭学習や宿題について

入学式、あるいは入学直後のトラブルのこと、勉強のことの2つが大きなテーマでした。入学前に小学校と話し合いをして十分に準備をしたにも関わらず、入学式や入学直後に問題となる行動が起きてしまうことが多いようです。やはり、机上の説明だけでは難しく、先生が子どもと関り始めなければわからないことがたくさんあると思います。入学前に話し合うことはもちろん必要なことですが、その後も、同じことの繰り返しになっても、先生と話し合い、子どものことを説明することの大切さを感じました。「入学式の日の問題が起こったのも、結果的には、先生と話ができてよかったのかもしれない」というお母さんの言葉に、トラブルが起こっても、それをプラスに変えていくパワーはすごいと思いました。

子どもの勉強については、多くのお母さん方がさまざまな工夫をされていました。我が子と向き合って作ってこられたその方法(知恵)を先生方に伝えていっていただきたいと思いました。保護者と教員が、伝え合うこと、話し合うことで、関係性や子どもの周りの環境を作っていくのだと再認識しました。

今回、特別支援学校へ通っている子どもさんのお母さんが参加されました。校区の小学校に通っている子ども達のお母さん方の中で、居心地の悪さを感じられはしないかと懸念したのですが、地域の子供達とどうつながっていくかという情報交換や意見交換がなされ、「地域とつながることが大切」という想いを共有できたことが良かったと思いました。

ノウハウ本やインターネットで情報が簡単に手に入り、メールで情報交換もできるようになっています。しかし、想いを共有したり、信頼関係を築いていったりするためには、向き合って話をしていくことが大切です。学校の教員との関係を



築いていく場合も同様です。話し合っていくことは大きなエネルギーが必要になります。なかなか伝わらなくて疲れることもあるでしょうが、そんな時にはお母さん方がまた集まって話をしてパワーを蓄えていただきたいと思います。保護者交流会は、そうした元気を取り戻す場所でもあったと思います。

＜高学年&中学グループ＞小学校3・6年、中学1年の保護者5名、ほうぷスタッフ、学生ボランティア
内容：自己紹介 兄弟関係 中学校への進学と中学校生活 親と教員との関係作り

中学校への進学を控えた高学年の保護者と、中学生の保護者とが、互いの思いや経験を自由に交換しました。中学生の子どもをもつ保護者に多くの質問が投げかけられ、質問に答える役割に固定させてしまったのではないかと懸念されましたが、アンケートでは「話を聴いていただいた」という表現がみられ安心しました。「語ること」が「聴いていただくこと」になり、「聴くこと」が「語っていただくこと」になるというステキな関係がみられました。また、子どもの“こだわり”をユニークに語る保護者の方の話には、“こだわり”も含めた子どもへの愛しさが、ひしひしと感じられました。

質問の中に、地域の中学校を選択したことについてどう感じるかというものがありました。保護者の方は「よかったーわるかった」という答え方ではなく、「娘は帰宅するや否や『明日は学校!』と言うんですよ」という生活の一コマや、近所に買い物に行くと娘が知らない子どもに声をかけられるというエピソードを語ってくれました。このような些細なことが積み重なって「地域で暮らす」ということが描けるのだらうと思います。また、親である「私」を主語にせず、「娘」を主語にして語る点に、大切な視点を汲み取ることができました。

次に、兄弟関係について悩んでいるという話を受けて、参加者それぞれの経験が語られました。障害の有無にかかわらず、兄弟喧嘩は必ず起こるものという意見もありました。「障害をもつ子どもの得意なことを理解し、それぞれの良いところを認め合う兄弟関係」を形成したいという親の思いも語られました。「自分の思いを互いに主張し合うと同時に、感謝の気持ちを伝え合う兄弟関係」を築いてほしいという思いも語られました。また、親が、兄弟姉妹それぞれに個別にかかわる機会をつくることによって、固有の関心を育むという工夫もなされていました。

さらに、障害をもたない子ども(兄弟姉妹)の置かれた状況を察して、「もの分かりの良い子に育ててしまった」、「自分には厳しいと思っているのではないか」、「人間関係などを含めてそれなりに必死の状況にいるのだらう」という思いが語られました。「障害児とその家族を支援」する〈ほうぷ〉の活動のなかで、障害をもつ子どもの兄弟のニーズは十分に検討されていません。また、保護者アンケートにも「兄弟の支援」というニーズが確認されたことから、今後の運営をすすめていくうえでの検討課題のひとつであるように思われます。



＜参加保護者の感想から＞

参加者10名・アンケート回収10名 全員が「良かった」と回答

- ・ 少人数だったので、お母さんのお話やお子さんの様子を詳しく聞いて良かったです。現在、宿題をどうするかが課題ですが、嫌がるほどやらせなくてもいいかなと思いました。

- ・ 子どもの中学校生活について他のお母さんからいろいろと質問されて答えていたのですが、話を聴いていただいて、逆に私がかかなりすっきりしました。毎回、他のお母さん方からさまざまなお話が聴けるし、自分の話も聴いていただけるし、今回も参加できてとても良かったです。もう少し時間があればと思います。
- ・ なかなか悩みや疑問に思っていることなど、人に話す機会がなかったので、いろいろなアドバイスをいただけて良かったです。
- ・ 中学生のお母さんから詳しいお話をさせていただいて、大変参考になりました。
- ・ 学校は違いますが、似た悩みを持っている親御さんと話ができ良かったです。高学年の親御さんの今の悩みを聞いてすごく参考になりました。
- ・ やはり時間的にいくらあっても足りない感じ。何回でも交流会を開いて欲しいです。
- ・ 皆さんの話を聞きながら、今までいろんなことを乗り越えてきたけど、まだまだ様々な事があると思いますが、頑張りすぎず、自然体でと思いました。
- ・ 中学生活の話が聴くことができ良かったです。我が子が通う学校が同じ状態であるかどうか不安ではありますが、心配するよりは目の前のことを一つ一つこなしていくことが大事かなと思いました。

◆ 保育報告

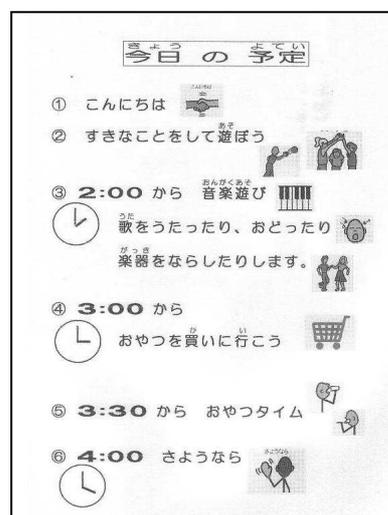
<タイムスケジュール>

- 13:00～ 受付開始(スタジオ)
- 14:00～ 音楽で遊ぼう(音楽療法士参加)

- ①自由遊び
- ②始まりの歌 ♪友達賛歌
- ③♪幸せなら手をたたこう
- ④スカーフレーン
- ⑤スカーフレーンの電車ごっこ
(ピアノSTOPで)

- ⑥楽器 ♪おもちゃのチャチャチャ 大きく鳴らしたり小さく鳴らしたり
- ⑦ナルコ たくさん鳴らして身体のどこかで止める等の遊びの後
♪オブラディダンス
- ⑧バルーン ツリーチャイム 順に前に持って行き鳴らしてもらう

- 14:50～ おやつタイム
- 16:00 一時保育終了・保護者への活動報告
- 16:20～ 活動の振り返りと交流



<ボランティア感想>

11名全員が「楽しかった」と回答

- ・ コミュニケーションをとるのが難しかったけど、私が描いて欲しいといった絵を描いてくれた時、すごく嬉しかった。
- ・ はじめはなかなか話せなくて、手もつないでくれなかったけど、終わりのほうになるとRちゃんの方から「お姉ちゃんと手をつなごう」といってくれたのが嬉しかった。



- ・ Nちゃんは言葉が無くてもしたいことを言ってくれるので、コミュニケーションがとれて楽しかった。でも、私をもっともっと気を配らないといけないことがあったので反省しています。
- ・ はじめはMちゃんも戸惑っていて、声をかけても返事がなかったり反応がなかったりしたけど、最後の方になると一緒に遊んだりMちゃんからくっついて来てくれる様になったので、戸惑いがなくなったのかなと安心した。
- ・ このようなボランティアに参加したのがはじめてだったので、どのように接したらよいかわからなかったけれど、Yちゃんの様子を見てたくさんのことを学びました。子どもは一人一人違うし、それぞれ個性があるので、もっといろいろな子どもと関わってみたいと思った。
- ・ 最初はうまくコミュニケーションが取れなかったのですが、最後の方はちゃんと僕の名前を呼んでくれたり、似顔絵を描いてくれたりしたので、すごく嬉しかった。途中で帰ったので、違う子と遊んだのですが、すごく元気で楽しかった。



＜保護者からボランティアのみなさんへ＞

- ・ 子どもは、自分から積極的に話しかけたりする子ではないので、上手くコミュニケーションを取れたのか気にかかっていた。消極的な子で上手く表現してなかったかもしれませんが、本人はとても楽しめたようです。帰宅後、「最初は緊張したけど、絵を描いたのが楽しかった！」と言っていました。
- ・ 帰宅後、子どもが「おにいちゃん、ボールで遊んだ。楽しかったよ」と言っていました。報告に「タクシー遊びが一番喜んでた」と書いてありましたので子どもに聞くと、「ドライブ、ブーン！キーン！」その時の様子を再現して「楽しかった、また行くよ。」でした。まだ出来事を上手く説明できませんけど、帰ってからのテンションの高さをみると、楽しかったのがよくわかりました。ありがとうございました。
- ・ 報告(今日の様子)に書いてもらったことがらで、子どもの様子がとてもよくわかりました。子どもをよく観察しながら、よりそってくれていたと思います。ホワイトボードにいろいろ書いて楽しんでたのは、たぶんあの子なりにその場に慣れようとしていたのだと思います。皆と同じ行動をとるのは、あの子にとっては、まだ大変なことなんです。
- ・ 子どもはボランティアの学生さんととても楽しく遊べたようです。話すことはできませんが 家に帰ってから遊んでいた様子を絵にかいて私にみせてくれました。たくさん遊んでいただいてありがとうございました。子どもと話すときもちゃんと子どもの目線に合わせてしっかり目を見て話してくれていたのが印象的でした。これからも今の純粋な気持ちを忘れずにがんばってください。
- ・ 帰宅後、Nは「楽しかったよ」と何度か言っていました。本人の口から聞いた言葉はそれだけでしたが、行く前に“Uさんと遊ぶんだよ”と告げただけでも、特に抵抗はなかったですし、帰ってからもとても落ち着いていたので、Nの自由遊びに、ごく自然な形で関わっていただけたのだなと思いました。



講演会 コミュニケーションについて学ぼう

「支援の視点は支援の始点」

2007年6月23日(土) 13:30~17:00

大阪市立城北市民学習センター 研修室2

講師：坂井聡氏(香川大学 教育学部 特別支援教育講座)

協力：株式会社アクセスインターナショナル

一時保育：大阪市立城北市民学習センター 研修室3

参加者45名

障害児の親：27名、教師：9名、介護職：7名、障害児の姉妹：2名

スタッフ：6名

保育：子ども11名(うち障害児7名)、保育スタッフ2名、

学生ボランティア8名(大学3名、短大2名、専門学校3名)

毎年大人気の坂井聡さんの講演会です。今回もたくさんのお申し込みがあり、45名で締め切らせていただきました。アンケートの感想からもうかがえるように、楽しく感じたり考えたりして学べる内容で、講師のわかりやすい説明が参加者の「良かった」という感想になったようです。皆さん、大変熱心に聞き入っておられました。質疑応答では、小学校の先生方からの質問が多く、模索をしている学校の様子があがりました。みなさんが学ばれたことをそれぞれ家庭や学校、地域に持ち帰っていただき、一人一人の子どもが自分らしく暮らしていくためにより良いコミュニケーションを取る工夫がされることを願っています。

<参加者感想>

講演会の内容については、アンケート回答者全員(42名)が「良かった」と回答されました。また、役に立つ内容だったかどうかについては、「役に立つ」39名、未記入3名でした。

○障害児の親からの感想

- ・ 親子の関係を見直すいい機会だと思っている。もっともっと学校現場の方に聞いて欲しい。
- ・ 初心に戻った気がした。子どもの成長(ゆっくりに)に対し、期待し求めすぎる自分を反省した。
- ・ 子どもと過ごす中でこちらの要求を優先しがちになっている自分に気づいた。
- ・ 各地で講演会をしてください。特に教育関係には多く行っていただきたく、先生のような方が多くおられればと思います。
- ・ 毎日、子どもとの暮らしの中で、わかっているはずのことなのに、なかなかできません。自分のかかわりを振り返るためにとっても参考になり楽しく勉強できた。
- ・ 具体的な内容が多く、生活に使えることがたくさんあったので良かった。
- ・ 障害をもっている子に対してだけでなく、健常児の長男に対しての接し方にもあてはまり、今日から早速誉めてあげたいと思った。
- ・ 今後の息子(自閉症)とのかかわり方に大きなヒントをいただいた。親の視点で親の思いや都合を息子に押し付けていなかったかと反省する良い機会になった。
- ・ 自閉症の子どもをもつ親なので、子どもの接し方について大変参考になった。



- ・ 今、中学校生活で本当にすごく考えることがたくさんあり、今日の講演を聞かせていただき、もう一度考えてみようと思った。
- ・ 楽しく、面白いお話で、しかもわかりやすかった。子どもに対して、温かく対応しようとして再度思った。
- ・ 具体的でわかりやすかった。問題行動の解決方法が実行しやすそうだった。怒ってばかりではめることが少ない自分を反省した。
- ・ 明るい話し方で2時間があつという間だった。問題行動ばかりに目が行っていたが、なんとかしんどさの根本をわからないといけないのだと思った。

○障害児の兄弟

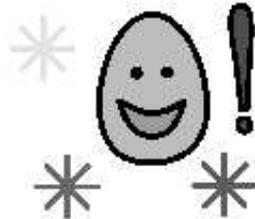
- ・ 自分が初心に戻るために毎回参加している。
- ・ 子どもの立場になって、大人が気づこうとすることが大切だと感じた。

○教師

- ・ 目からうろここという感じで考え方が変わった。いろいろと視点を変えないと思った。
- ・ わかりやすく楽しくて楽しかった。現場での実践の話もあってよかった。
- ・ 楽しくわかりやすかった。目からうろこのお話をたくさん聞かせていただいた。特別支援教育も変わってくるものだと思う。
- ・ 日々の指導に直接いかせる話が聞けてよかった。

○介護職

- ・ 楽しい話で退屈しなかった。
- ・ 自分の考えがとてもカチコチなんだと感じた。



◆ 保育報告

<保育ボランティア感想>

- ・ 先回の一時保育よりYちゃんと仲良くなれた気がしました。
- ・ 1対1で3時間一緒にいてとても親しくなれました。おもちゃを使って遊んだり、絵を描いて遊んだりして、充実した1日が送れました。
- ・ Kくんが僕のことを覚えてくれていたことはすごく嬉しかった。遊んでいる途中、Yちゃんと喧嘩したりして、少し気分が落ち着いていない時に何も対応できなかったのが残念でした。自分の力の無さを実感させられました。
- ・ 元気いっぱい普段疲れ気味な僕もいっぱい元気をもらえました。サッカーのおもちゃと一緒に遊べてとても楽しかったです。
- ・ Aくんはずっとお兄ちゃんと遊びたかったみたいでした。でも、お絵描きや車遊びは一緒にしてくれました。車やコロコロするおもちゃがお気に入り「ぶーぶー」とか言って楽しそうでした。

<保育スタッフ報告>

研修室という狭い空間で、3時間近く異年齢児が過ごしました。子どもたちも学生さんも一人ひとりがあるのままだまに向き合うところからはじまります。もちろんスタッフも。2回3回とリピーターの学生さんは、スタッフのほんの少しの助言で、他の学生さんをまとめている姿がみられるようになります。でも、一人ひとりがそれぞれの時間を楽しみ、子ども同士の関わりがなかなか見られないのがこれまでの経過です。学生さんと1対1で楽しんで帰る姿だったといえます。

今回、1つのハプニングが起きました。YちゃんとKちゃんのけんかです。Yちゃんは興

奮しつとも疲れているようすで、泣き出し部屋の外へ。Yちゃんの心と体の疲れをほぐそうと、保護者に連絡を取り経過を伝えました。「あとでまたおいで、まってるね」と声をかけた後、講演会会場の母の膝の上へ。しばらくして、Yちゃんは保育室に戻って来ました。

このハプニングの時、心配そうな表情で見守るKちゃん、Aちゃん。部屋の外に出て心配そうな表情でYちゃんの帰りを待ち続けるHちゃん。一人ひとりの空間から、仲間を思いやる空間へと変わっていきました。Yちゃんが戻ってくると、仲間に関わる姿が自然に見られました。ほうぶの保育はありのままだからこそ、自分で育っていると感じました。

子ども達も学生さん達もみんな素敵にあふれていました。大人が設定したものがなににもなくても、生まれてくる姿がいつもあります。またみんなに出会いたいです。



1ページからここまでの事業は全て

独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」の助成事業です。



そのほかの活動報告

● 子育て支援

あさひ子育てネットワーク「きしゃぼっぼ」が、6月18日(月)(10:30~11:30)旭区在宅サービスセンター多目的室において、毎年恒例になった「まじょ魔女」さんによる「おはなし会」を開催しました。19組の親子が参加してくださり、楽しい時間になりました。公共機関からのイベント共催の依頼も増えてきました。ママたちはパワフルになり、しっかりと地域に根ざした活動になっています。

● 個別活動支援

独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業 障害児の余暇を充実させるための個別活動とともに、障害児の自立に向けた個人将来計画づくりを進めています。思いを表現することの難しい子どもの将来を協働で思い描くことをとおして、本人、親、友人、親類、支援者、ピアカウンセラーなど、それぞれの立場から意見を交換しています。子どもを中心とするネットワークづくりができればと思います。いろんな人が集まって意見交換をすることの大切さや楽しさを感じる一方で、「子どもの想い」が置き去りにされることのない計画作りの難しさも痛感しています。

● 不登校児支援

市立青少年会館が閉館され、不登校児支援はどうなるのだろうと不安いっぱいですが、「ほっとスペース」事業は継続されることになりました。また、公共機関の職員の異動も多くありましたが、事業担当者や役所の職員の方々のご理解とご協力により、新メンバーで「あさひ不登校ねっと」の話し合いを行なっています。

この春、大阪市では大規模な組織変更があり、「子ども青少年局」ができました。「生まれる前から乳幼児期を経て青年期に至るまでのこども及び青少年に係る施策を総合的に推進する」そうです。「次代の大阪を担うこどもや青少年」から、障害・不登校・ひきこもり・非行などさまざまな生きづらさを抱える子どもや青少年が排除されることのないよう、福祉と教育が連携をして取り組んで欲しいと思います。

いろんな人がごちゃまぜに暮らしていく「ディープおおさか」らしい支援策が推進されることを願っています。

